

計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

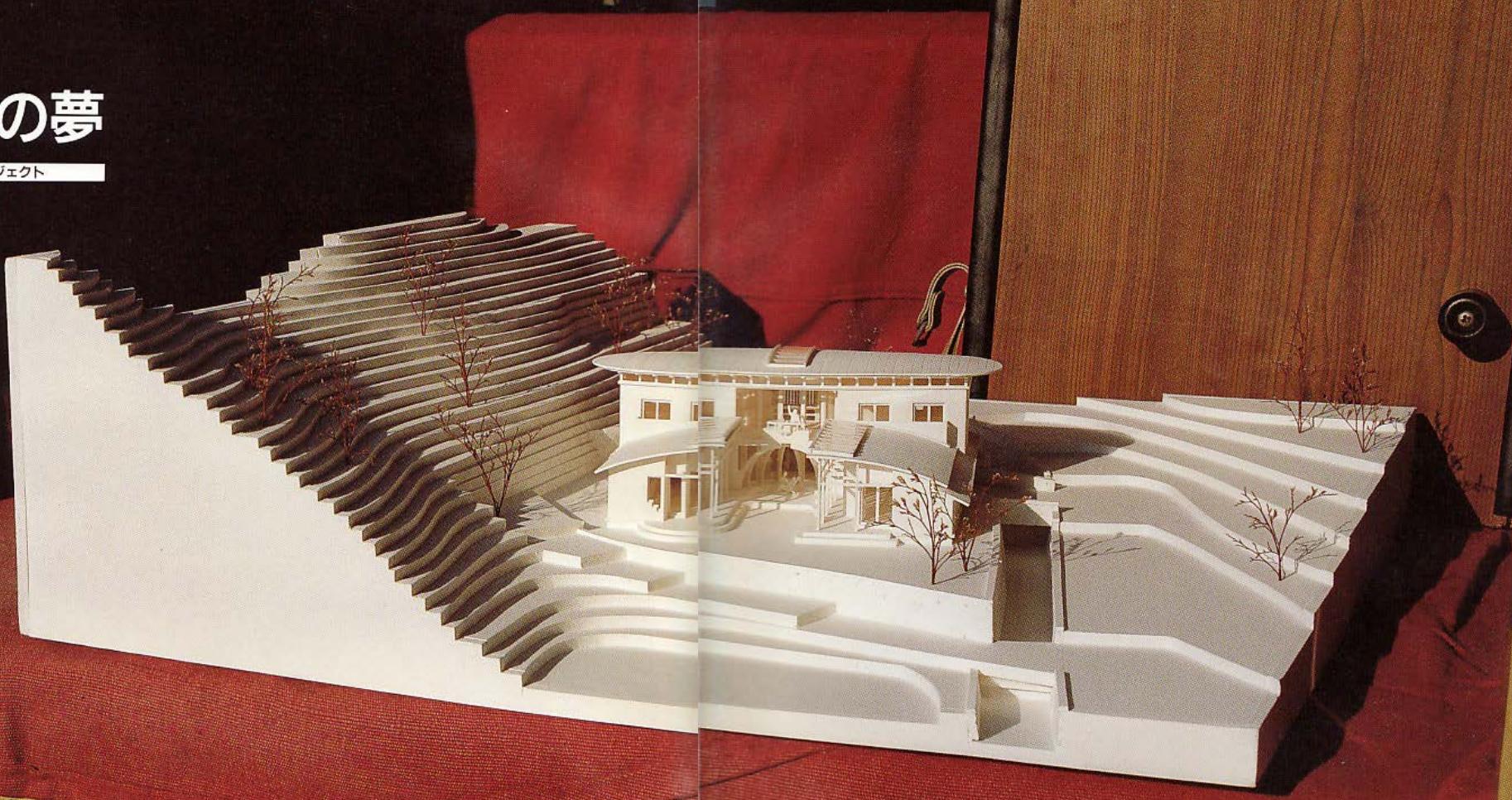
'93~'95

⑫

覚園寺の家計画

文=白鳥健二

写真=大橋富夫



横浜 88

覚園寺の家計画

—小型宇宙船の中で創造したもの—

■イメージプロセス



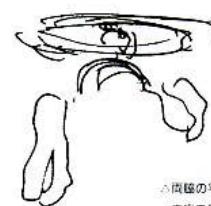
△「収縮する螺旋的経過の渦」を一周創造して
みただけで、至上の幸福である (COSMOS号
で見た宇宙のPURE ENERGY)



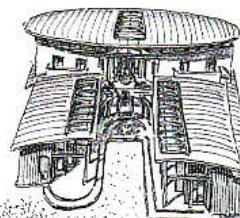
△格円形
飛行機の翼のような軽い屋根



△格円から突き出した二棟の平屋



△複数の平屋と中央のアプスが
中庭を形成していく



△模型スケッチ
両脇の平屋と中央の凸階段で全体を構成

「計画案は実はまだまだある……」と、本年4月号で述べたところだが、ほとんどの案がいろいろな理由で水の泡となってしまった。それこそ計画案の夢と化してしまったのである。残念無念の限りだが、しかし、これら数ある案の中には、その後実現する夢もチラホラと出て来ている。この「覚園寺の家」もその中の一つというわけだ。

本欄1月号では、1979年式ウエストファリア社製の小型宇宙船ならぬ、私の愛用しているフォルクスワーゲンキャンパー(COSMOS BUSと勝手に命名している)の利用法について若干触れさせていただいた。その記事を記憶している読者の方もいらっしゃるかも知れません。「覚園寺の家」は、実はこの小型宇宙船COSMOS号の中で誕生したものだ。

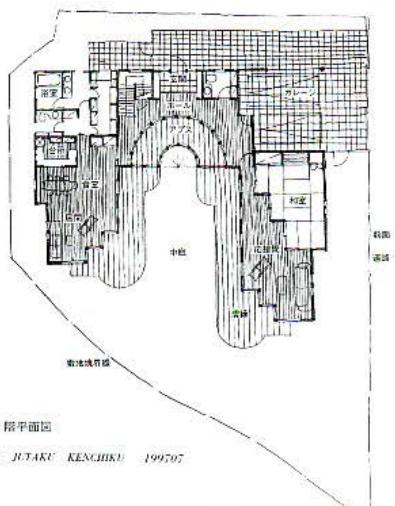
ここは、いわば私の移動アトリエのようなもので、鎌倉市由比ヶ浜のアトリエを母船とするならば、この小さな移動空間は母船を横に360°の方角どこへでも出掛けいくためのツールである。

建築家友人の鈴木喜一氏が主宰するアユミギャラリーが東京・神楽坂にある。数年前、このギャラリーで、私の「旅のスケッチ展」を開催した時も、この移動アトリエが大活躍。これを会場脇に持ち込み、本計画の構想案を接客の合間にひた制作したのである。2週間の会期中、実は狭いアトリエで寝泊りしながら、この案を産み出した。

観覧会もとっくに終り、しばらぐの月日が流れたある日、私はあの時作った構想案を携え、例の移動アトリエで建設予定の敷地を訪問することにした。神楽坂で描いた案を実際に建つ場所に持ていって、そこでもう一度ジックリと検討してみたかったからだ。

鎌倉市二階堂に覚園寺というお寺がある。敷地はこのお寺の隣にある。山紫水明の大谷石の奥に移動アトリエを静かに潜入させよう。神楽坂のあの螺旋の中で創作したエスキースをカバンから取り出し、愛用の小さな図版にベタッ張りつけ、まずはゆっくりと眺める。あたり一帯の静寂と同調しながら、いよいよ施主に提出する基本案の見直し作業にとりかかるろう。

好きな場所でゆったりとした姿勢をとり、自分一人の世界



△1階平面図

に心を開放する。“次第に体が楽になり、鋭敏な思考に目覚め、やがて至上の幸福を感じられるようになる”——マハリ・ヨギ(インドヨーガの行者、1960年代、グールーと呼ばれていた)は、こう述べている。

私の場合、鋭敏な思考に目覚めるかどうかはともかく、自分のお気に入りの静寂な場所に極小アトリエ空間をスッポリと潜入させ、まわりの「氣」の中に入り込み、すこしづつ同調していく。神楽坂で作った基本案をのんびりと眺めながら、自分一人

の世界に心を開放する。全く同じ空間の中で「昔の案」と再会する。神楽坂商店街の懐かしいの中で作った昔の案。それを今、じと眺めていると、過去と現在との間にはさまっている「しばらくの月日」を感じることが出来る。

「あの時」と「今」を結ぶ時間・空間。この時間空間はティヤール・ド・シャルダンに依ると、「螺旋的経過」なのそうだ。神楽坂からいろいろな場所を廻り廻って、ここ二階堂にやって来た。螺旋的経過を通り抜けて、私の中に何やらワクワクしたエネルギーのようなものを感じる。あの時とは全てが違うのである。全く同じアトリエに居ながら全てが違うのである。同じものと違うものが今、同時に展開している。

「覚園寺の家」の計画のエッセンスは、実は神楽坂どころかそれよりずっと以前の、そのまた以前にさかのほる。

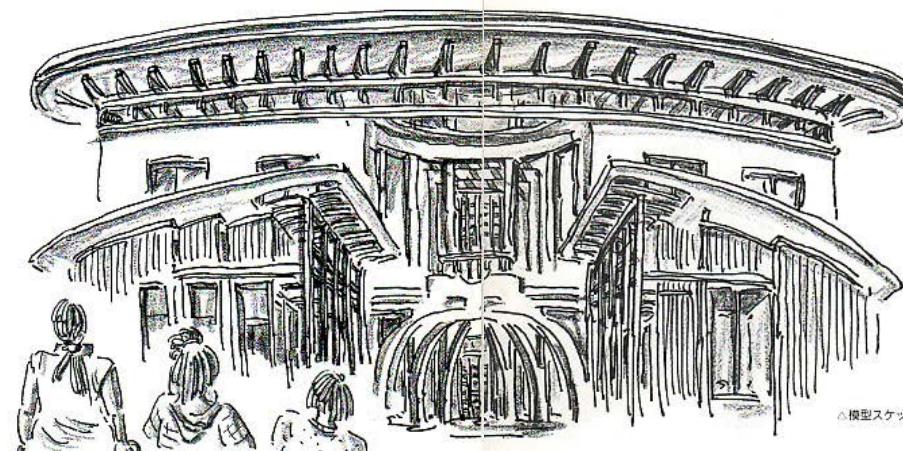
そもそも、この字型の平屋の両翼部分は、前号で紹介した「御成小学校計画案」から遡ってきたものであり、両翼の中間部分のオープンスペースと、その奥に位置するアプスの関係性は本年4月号の「材木座ビーチハウス」より遡り遡って来たものだ。さらにこの字型の奥の格円形の屋根は、同じく1月号の「鎌倉ケアセンター」のそれである。こういう部分はまだまだある。これこそ輪廻転生というヤツか……。

この大きな渦に巻き込まれるから、同等同質の建築が私の中で繰り返されている。この、目に見えない巨大な渦から逸脱するには……? この輪廻から解説するためには一体どうすれば良いのか……と考えてみる。

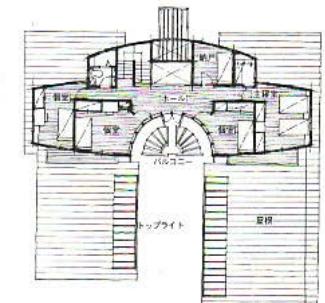
本当にHIGHになるということは、自分を忘れてしまうことなんだ。自分を忘れるということは、他の全てのものを見えることと同じだ。GREATFUL DEAD(というロックグループ)を主宰するジェリー・ガルシアは、こう語っている。輪廻からの解説とは、ある意味ではこういうことなのかも知れない。

無我夢中の時に、実は全てのものが見えている。ティヤール・ド・シャルダンの示す「全宇宙にわたる、この集合的な悟りが収縮する螺旋的経過の渦」が見える。

たかが「覚園寺の家」で途轍もない話になってしまった。好きな場所でゆったりとしていたら、知らないうちにすっかりHIGHになってしまった。螺旋的経過の渦なんて、そもそも私になんか見えるはずがない。見えるかも知れない……と、ほんの一瞬想像するだけで至上の幸福なのである。小型宇宙船に乗っていてこその気分である。



△模型スケッチ（中庭より中央奥のアプスを見る）



△2階平面図